

県とJR東海との対話について

- ・下記のとおり、県とJR東海との対話に時間を要しているのは、「JR東海の認識不足に基づく、一般の人はおろか専門家でもわかりにくい説明が続いていることが大きな原因である。」
- ・JR東海金子社長は、「2027年時点での完成に向けて、工程は切迫した状況にあり、6月中にもヤード整備等の準備を再開する必要がある。」としている。JR東海のヤード整備等の準備は数ヶ月で終了するものであり、完成に影響するのは、本工事にいつ入るかである。「本工事に入るまでには、まだ、JR東海が説明すべき事項がある。JR東海が、今行うべきことは、ヤード整備等準備ではなく、国土交通省が設置した有識者会議や、県が設置した専門家会議において「引き続き対話を要する事項」47項目についての説明責任を果たすことである。」

<県とJR東海との対話の経緯>

1 「トンネル湧水の原則全量戻し」を表明するまで、4年半を要する（2014年3月～2018年10月）

- ・2013年9月、JR東海は、環境影響評価準備書で、南アルプストンネル工事により、大井川の流量が「毎秒2 m³/秒減少」と予測した。これに対し、2014年3月、環境影響評価準備書に関する知事意見で、「トンネル湧水の全量を戻す」ことを求め、それ以降も求め続けた。
- ・しかしJR東海は、「トンネル湧水による大井川の流量減少分は特定できる」ので、「河川流量の減少量や度合いに応じ、トンネル湧水を大井川に戻す」（トンネル湧水の一部は山梨県へ流出する）という主張を続けた。このため、県とJR東海の間において、トンネル工事に伴う環境への影響回避に向けた具体的な措置に関する対話を進める事が出来なかった。
- ・2018年10月、JR東海が、「原則として静岡県内で湧出するトンネル湧水の全量を大井川に流す措置を実施する」ことを表明したことにより、2018年11月、科学的根拠に基づく対話が始まった。

2 2018年の専門部会設置後の対話において、まだわかりやすい説明が行われていない（2018年11月～2020年6月現在）

(1) 水循環についてのJR東海の認識不足

- ・2014年7月に制定された水循環基本法第3条第2号において、「水が国民共通の貴重な財産であり、公共性の高いものであることに鑑み、水については、その適正な利用が行われるとともに、すべての国民がその恵沢を将来にわたって享受できることが確保されなければならない。」として、同条第4号において、「(中略)流域に係る水循環について、流域として総合的かつ一体的に管理されなければならない。」と規定している。
- ・JR東海は、この水循環基本法の基本理念を理解することなく、精度が高いとは決して言えない予測モデルでの水収支解析により、「トンネル湧水の全量を大井川に戻せば河川流量はこれまでより増える」、「工事中に静岡県内の地中の水をトンネル掘削により大井川流域外に流しても大井川の河川流量は減らない」と主張している。これに対し、国設置の有識者会議において、委員からも、「量が増えるというおいしい話はない。」などと認識不足を指摘されている。

(2) リスク管理システムの重要性についてのJR東海の認識不足

- ・県は、事業の実施において、ゼロリスクは達成できないのでリスク（推定上の不確実性）の存在を認めた上で、いかに事前にリスクを回避・低減し、事中、事後の観測・計測情報に基づく「リスク管理の考え方・方針・方法の説明を求めている。
- ・第1回有識者会議において、委員の一人から、「普通は住民側がゼロリスクを求め、事業者側がリスクの不確実性を訴える」との指摘があった。
- ・JR東海は、この考え方を、2020年5月15日の第2回有識者会議で認識し、6月2日の第3回有識者会議で認識を改めた。

(3) JR東海のわかりにくい説明

- ・県専門部会及び県はJR東海に対し、パワーポイントによる図表の説明ではなく、住民が理解できる文章で説明してほしいと再三要請してきた。
- ・第2回有識者会議で委員から、「静岡県の資料はわかりやすく整理されている。JR東海も、わかりやすく資料を作成してほしい。」と指摘され、第3回有識者会議ではじめて文章による説明を始めた。

(4) 地元住民の“命の水”に対する思いや不安に配慮しないJR東海の説明

- ・県環境保全連絡会議専門部会等において、JR東海は、「2 水循環についてのJR東海の認識不足」における発言に加え、「中下流域の地下水が減ると思う人は誰もいない」といった発言を繰り返している。
- ・水資源基本法の基本理念を理解せず、科学的根拠に基づかないこれらの発言は、不安を抱いている地元住民のJR東海への不信感を増幅させている。有識者会議においても、委員からも、「相手が何を知らたがっているのか、何を不安に思っているのかというのを理解するのが大事である。」と指摘されている。